はじめに

地球が誕生してから現在までを二四時間に置き換えると、約三〇万年前に進化した現生人類ホモ・サピエンスが登場するのは、深夜〇時の五秒前、二三時五九分五五秒だ。宇宙の壮大な歴史に比べれば、一人の人間の一生はわずかに瞬きの間を占めるにすぎない。あなたがこの場にいることすら奇跡である。実際に生を受けた私たちの陰には、受精できずに終わった無数の卵子や精子、存在していたかもしれないありとあらゆる人間がいる。そう考えると、あなたや私はほぼゼロに等しい確率を覆し、運よく誕生できた稀有な存在なのだ。しかも本書を読んでいるあなたは、おそらく多くの人が手にすることすらできない特別な機会を享受してきた一人だ。教育を受け、本が読めるという僥倖（ぎょうこう）に、すべての人類が恵まれているわけではない。短いとはいえ、この世の生を謳歌できる私たちは極めて幸運なのだ。にもかかわらず、この貴重な存在の時間を私たちはどのように過ごしているだろうか。人生の大半を絶え間ない所有の追求に捧げ、所有物を他人に奪われまいと汲々としているのである。

そもそも生まれ落ちただけでも儲けものなのに、豊かな社会に暮らす私たちの多くは所有こそ人生の目的と信じこみ、可能なかぎり多くの資産の蓄積を目指すライフスタイルを貫いている。だが基本的なニーズや快適さが満たされたあとは、それ以上のモノを手に入れても充足感が増すことはめったにない。それでいて、人間の心にはもっと所有したいという飽くなき欲望が生まれる。物理的世界に存在するだけでは飽き足らず、多くを所有したほうが幸せだと信じ、物理的世界の所有権を最大限に主張しようとの強烈な衝動に駆られる。だが、考えてみてほしい。人体を構成する素粒子は、宇宙の彼方で起きた爆発の名残の星屑だ。私たちは宇宙の一部として生まれ、限られた寿命しかない存在でありながら、その生涯の大半を宇宙のあれこれは自分のものだと主張することに費やしているのである。思い上がりも甚だしいと同時に、最終的には無意味な追求に人生を浪費していると言えるだろう。

この惑星に暮らすあいだ、私たちは所有物をめぐって争い、所有物を囲いこみ、所有物を渇望し、人生の目的とはつまるところあらゆるものに所有権を主張することだと考える。だが結局は死んで土に還り、躍起になって入手した所有物の行く末を知ることもない。敵の侵入を防ごうと塔を打ち建て、濠をめぐらせ、一生かけて砂の城を築こうとも、すべては時間という波に押し流されて消える。人間も無知ではない。いずれは死すべき定めにあり、死後の世界に何も携えていけないことはだれしも承知しているのだが、所有の追求というやむにやまれぬ動因〔人を行動に駆り立てる内的な欲求や衝動〕に突き動かされ、多くの人にとってはそれが人生の目標と化してしまうのだ。

人間を人間たらしめているもの、それが所有である。所有が心に及ぼす力は強力で、所有物を守るために命を危険にさらす人さえいる。死が差し迫った瞬間には何を所有していようと結局は無益だと悟りそうなものだが、そうではないらしい。一八五九年、乗客四五〇名を乗せ、オーストラリアの金鉱からリバプールに向かっていたロイヤル・チャーター号が、ウェールズ北岸沖で難破した。故郷を目前にして掘り当てた金塊を手放す気になれなかった多くの乗客は、金塊を入れたベルトを巻いたまま溺れ死んだという。物質主義に陥った愚者の物語は歴史や神話にも散見される。触れるものがことごとく金に変わる能力を手にしながらそれを厭うたミダス王の神話はよく知られているし、グローバル経済を手玉に取る金融機関によって市井の人々の生活が破壊されるという、現代の景気循環がもたらす事態も、その好例だろう。資産の蓄積に熱中するのは投機家ばかりではない。人類の大半がその熱に浮かされているのだ。

人は一生、所有物の蓄積にとらわれる。私たちは世代交代のたびに残されたモノの大半を捨て、自分だけの新たなモノの獲得に乗り出す。所有だけが目的ではない。さらなるモノを追い求めるのは、そうすることで獲得衝動が充たされるからだ。所有物は所有者を思い出させるよすがともなる。そのために、人はみな所有によって、この宇宙に自分が生きた痕跡を残そうとする。二〇年前、妻のキムと私は、ともに若くして亡くなった妻の両親の全財産を相続した。財産の大半は義両親が大切にしていた家財道具で、いまでも使っている数点の家具を除き、ほとんどは屋根裏部屋にしまいこまれている。処分すべきとわかっていても、キムの腰は重い。最後に残った両親の生の証が失われてしまうように感じるからだ。

人はみな所有物を通じて、自らの生きた証を残していく。記念品や骨董品が魅力的なのは、そう

した品が過去とつながっているからだ。私はオークションハウスやリサイクルショップをめぐるのが好きだが、訪れるたびに、こんなものまで集める人がいたのかと驚かされる。だが、どの品も一度は所有者がいたのだ。これはだれかが是が非でも手に入れたいと願った品かもしれない。その人はこの品を入手するために必死に働き、手に入れた際には喜びを噛みしめたかもしれない。ひょっとしたら、命の危険を賭して獲得した品かもしれないのだ。勲章、ミニカーのコレクション、銀の手鏡――そのどれもが、以前の所有者にとってはおそらく特別な意味を持っていたのだろう。大切にしている持ち物がいずれ破棄されるか、自分のことを知りもしない他人の手に渡るとわかれば、あなたはどんな気持ちがするだろうか。気にならないという人もいるだろうし、反対に人一倍モノへの執着が強い人もいるだろう。だがいずれにせよ、所有という行為は、種としてのヒトの行動を動機づけるものは何かについて、奥深い真実をあぶり出す。「情動（エモーション）」と同じ語源を持つ「動機づけ（モチベート）」という言葉以上に、この文脈にふさわしい用語はない。なぜ私たちは所有の必要に駆られるのだろう。そしてなぜ所有は、これほど大きな情緒的なつながりを生み出すのだろうか。

裕福な人は財に恵まれ、貧しい人よりも多くのものを買うことができるが、所有は単なる経済状態を表すにとどまらない。むしろ私たちは、所有物や所有したい物とのあいだに、情緒的なつながりを築いているのである。私たちは欲しいものが手に入れば幸福になれると考えるが、実際には欲しいものが手に入っても幸福になれないケースは多い。心理学者ダン・ギルバートはこれを「欲求ミス」と名付け、人間が陥りやすい錯誤だとしている[1]。人間はどうやら、モノの獲得がもたらす喜びや満足を正確に予測できないらしい。所有については、とくにこの法則が当てはまる。現に消費

者向けの広告の大部分は、「この商品を所有すればもっと幸福になれます」という〝約束〟を売ることで成り立っているのである。

欧米人の多くが誇りと喜びを感じる、あのアイテムを考えてみよう――最初に所有した車である。大概の人は車を入手するため懸命にアルバイトに励み、ようやく手に入れた車を誇らしく思い、その車を必死になって守る。最初の車が、自分のアイデンティティーの一部となるのだ。毎年、カーリースの車や保険をかけてある車を盗難から守ろうとして、重傷を負う人が後を絶たない。ときには命を落とす人すらいる。危機にさらされているのは金銭的な損害ではなく、所有権なのだ。持ち物を奪われそうになると、人はあたかもわが身の安全が脅かされたかのように、理性を欠いた行動に出る。執着が強いと、所有物とのあいだに歪んだ関係性が生じることもある。盗まれた車を取り返そうとした所有者が、高速で走り去る車の前に立ちはだかったり[2]、ボンネットにしがみつく[3]といった無駄なあがきをする場合がある。冷静に考えれば、たかが車のために命を危険にさらすのはおかしいとほぼ全員がわかるはずなのだが、それでもはずみでやってしまうのである。それでいて、ご近所さんの家の私道に新車が停まっているのを見ると、とたんに自分の車が気に入らなくなり、高級な車に買い替えたくなったりする。所有は競争を激化させる。相手よりつねに一歩先んじようとするこのレースに勝つのは、並大抵のことではない。前方には絶えず新たな競争相手が現れ、後方からは他の競争相手が追い上げてくるからだ。

さらには、所有がもたらす長期的な悪影響の問題もある。必要以上にモノを買い、消費する人の多くは、それが後世のことを考えない無責任な行為であると十二分に承知している。限りある資源

が減ってしまう上に、エネルギー消費量と温室効果ガス排出量が増え、気候変動が引き起こされるからだ。地球温暖化の原因は人口増加と人間の活動であり、なかでも最大の要因は人間の消費パターンである。[4] にもかかわらず、個々の人は自分に責任があるとは考えない。世界の八〇億の人々に比べたら、自分の行動など微々たるものだと言い訳する。ほかのみんなが好き勝手しているのに、なぜ自分だけ行いを慎まねばならないのか、というわけだ。わが子のためなら進んで命を捨てられる人も、行き過ぎた消費主義を次世代のために進んで改めようとはしない。私たちを所有へと駆り立てる動因は、それほど強力なのである。

二〇〇四年、年次報告書『地球白書』を刊行するワールドウォッチ研究所は、人間の行いを以下のように報告している。

> 家計支出、消費者数、原料採取量など事実上すべての基準において、過去数十年間の先進国の財およびサービスの消費は着実に上昇しており、多くの発展途上国でも消費は急速に伸びている。
>
> 最富裕国が飽くなき大量消費をこのまま続けた場合、資源の枯渇や回復不能なほどの地球環境の悪化が生じる前に消費に歯止めをかけられる見込みは、極めて低くなるだろう。[5]

報告では続けて、これを裏付ける証拠が消費カテゴリーごとに提示されているが、なかでも着目

すべきわかりやすい数値がある。土地が資源を生産し、廃棄物を吸収できる能力のことを生物生産力と言うが、現在地球上で生物生産性を有する土地の面積は、一人当たり一・九ヘクタールである。だが、すでに人間は平均で二・三ヘクタール相当を使用しているのだ。この数値は「エコロジカル・フットプリント」と呼ばれ、上はアメリカ人の平均値とされる九・七ヘクタールから、下はモザンビーク人の平均値〇・四七ヘクタールまで多岐にわたる。世界の人口は毎年八三〇〇万人ずつ増加しており、人口がこのまま継続的に増加すれば状況は悪化する一方だ。増大する不平等に、私たちはどう対処すればよいのだろうか。

持てる者と持たざる者の不平等が所有によって生じるとすれば、たとえ資本主義の熱烈な支持者であっても、すでに収拾のつかないほど格差が広がっている現実は認めざるを得ないだろう。世界の人口の一％未満が全世界の富の半分以上を所有している現状が引き金となって、猛威を振るう略奪、騒乱、暴動、革命、戦争が生じているのである。中国とインドの人口は合わせて二七億五〇〇〇万人にのぼる。その大半が貧しい人々だ。先進国は、発展途上国が同程度の繁栄を志向するのを阻み、富める国という特権的な地位を守ろうとする。そうした国々は、自らの行為を道徳的な観点からどう説明しようというのか。さらにその行為の結果として、紛争も生じている。多くの地域で戦争が起きているが、そのどれもが所有をめぐる争いという同じ側面を抱えている。近年のヨーロッパにおける難民危機は外国人嫌悪や所有権喪失の恐怖を呼び起こし、それに伴い各国の政策が右派の保護主義へと転換されている。今日の政治には、所有と統制を表す用語が氾濫している。アメリカへの不法移民の侵入を阻止するとして「壁」建設計画を推し進めるトランプ大統領も、移民

労働者や難民の流入を食い止めるため欧州連合（EU）からの離脱を図るイギリスも、その流れの一端を占めている。

なぜいま、本書なのか。紛争の根本的原因が所有であることを、なぜ憂慮すべきなのだろう？資源をめぐる争いはいまに始まったことではない。データを見れば、世界はじつは昔よりずっと住みやすい場所になっていることがわかる。人間の幸福度を測るほぼすべての主要な尺度において、人々の生活はわずか数百年前より大幅に改善されている。にもかかわらず、私たちの大部分は、世界は破滅への道をひた走っていると考えている。「衰退論」として知られる現象だ。過去は現在よりはるかによかったと信じる態度である。

過去数年のさまざまな世論調査によって、先進国の国民の圧倒的大多数が、世界は悪くなっていると信じていることがわかった。だが興味深いことに、この悲観主義は経済成長を遂げつつある発展途上国の国民には見られない。[6] 衰退論という歪んだものの見方はここでも右派政治家の目論見に合致し、ナショナリズムや保護主義を煽り立てるのに利用されている。衰退論が根強い理由はあまたあり、人間の認知におけるさまざまなバイアス（昔はよかったというバラ色のノスタルジアや、将来の危険を必要以上に警戒しがちという富裕層に顕著な傾向）が原因のことも、「楽観主義よりも悪いニュースのほうがネタになる」というよく知られた言い回しが当てはまる場合もある。衰退論の概念を用いると、未来に対していわれのない恐怖を抱いた場合に、なぜ極端な行動や過激な政治家が正しく見えてしまうのかがよくわかる。

このような悲観主義とは好対照をなすのが、心理学者スティーヴン・ピンカーだ。熱烈な楽観主義者である彼は、破滅論者が不当なパニックを煽っていると考える。[7] ピンカーによれば、現在の繁栄にたどり着くために天然資源の消費増加という代償を払う必要があったとはいえ、暴力、健康、富といった進歩のあらゆる尺度に照らして、世界は昔よりよくなっている。年々ますます多くの人がより健康で豊かな暮らしを見込めるということは、よりよい人生が送れるようになったということだ。だが、この繁栄はいつまで続くのか。そして、とどまるところを知らない消費主義が地球環境に与える悪影響は？　心配ご無用、とピンカーは言う。歴史が証明しているように、これまで人間は危機的状況に陥るたびに、創意工夫と知性を発揮して逆境を乗り越えてきた。今後もわれわれは、必要に応じて方向転換を行うことで、環境問題に対処していけるだろう。そうピンカーは断言する。彼の言うとおりであってほしいと私も願っているが、将来の解決に信を置くよりは、確実に環境問題を引き起こすとわかっている行動をいますぐ改めるほうが、明らかに良識にかなっているのではないだろうか。

気候変動はすでに私たちが直面している明らかな危機であり、簡単にすぐ解決できる問題でもない。気候変動がこのまま続けば将来重大な変化が訪れ、地球上の動植物に深刻な悪影響を及ぼすかもしれないという点に関しては、全世界の専門家は意見の一致を見ている。だがこの問題に関しては、極端な悲観主義も楽観主義も、一様に危険だ。悲観主義の問題は、事態を変えようとしてもどうせ無駄だという諦めを生じさせ、それによって解決策を探る努力を怠るようになる点である。一方で、未来の科学とテクノロジーがあらゆる問題を解決してくれるだろうと過大に期待する行き過ぎた楽観主義も、同様に無責任だ。そう信じることで、ただちに現在の行動を見直し、変えようと

する喫緊の必要性を無視することになるからである。

もちろん、人口増加による過剰消費がもたらす現代の問題の多くは、科学と未来のテクノロジーによって克服することが可能だろう。しかし適切な教育を施せば、現行のやり方を改めるという方法で、壊滅的な環境破壊を避けることが可能なのだ。生活水準や教育水準が高いほど、人は環境問題に関心を払うようになる。たとえば二〇一七年から一八年にかけて放送されたBBCのドキュメンタリーシリーズ『ブループラネットⅡ』で、プラスチックごみをのどに詰まらせて死ぬ海洋生物のショッキングな映像が流されて以来、イギリスをはじめとする各国では、使い捨て消費経済の負の側面であるプラスチック包装やプラスチックごみの削減を目指す運動が耳目を集めるようになった。大海の一滴に等しいとはいえ、現在では、プラスチック製ストローはイギリス国内のバーやレストランからほぼ完全に姿を消している。それ自体は小さな一歩かもしれないが、悲惨な状況を知った視聴者や企業がすばやい行動を起こせることを示す好例となった。小さな一歩が大きな運動に結びつくこともある。環境保護に関する責任感の欠如が積み重なるとさまざまな問題が生じる点については本書でも取り上げるが、それと同様に、人々が一団となって環境問題への関心を高めれば、解決策が見つかる場合もあるのである。イギリスが季節外れの暑さに見舞われた二〇一九年の春、環境保護団体エクスティンクション・レベリオンがロンドン各所を占拠して交通網を完全に麻痺させる抗議活動を行ったが、あの運動で特筆すべき点は、それまで過激な市民活動などに縁のなかった、地位も職業もさまざまな成人や子どもが参加していたことである。あれはアナーキズムというよりは、気候変動に一向に歯止めがかからないことへの不安や欲求不満が噴出したものだった。

教育を受け、健康と富に恵まれた富裕層の中から、衰退論をなぞるかのような現状に危機感を抱き、よりよい未来のために立ち上がる人々が現れたのは、まさに「放っておけば自然と物事は好転する」「テクノロジーの進歩で解決できる」といった楽観主義を人々が信じきれなくなっているからにほかならない。気候変動や環境問題の場合、いまではメーカーが方向転換を図り、消費者の要求に応える形でプラスチックの代替素材に投資するまでになった。二〇一九年一月には、世界有数の化学メーカーであるダウが、世界各国の企業が参加するアライアンスを率い、一〇億ドルをかけてプラスチックごみの除去に取り組むことを発表した。同社は今後さらにこの取り組みに一五億ドルの資金を投入する予定だ。

世界の人口が増加すれば、生活の質（クオリティ・オブ・ライフ）を向上させるためのエネルギー需要が高まることは避けられない。だが所有欲を満たすために消費主義に耽るという悪癖は、不要なものとして退けるべきだ。危機感を募らせた人々による自然保護活動によって、欧米ではここ三〇年で毛皮や象牙の需要が減少した。同様に、消費主義についても行動を変えることはできるはずである。そのためには、所有の真実を覆い隠しているふたを取って、私たちがなぜ必要のないものを手に入れたがるのか、その真の動機づけを明らかにする以上によい方法があるだろうか。

本書は、所有をめぐる心のはたらきがいかにしてヒトという種を形作ってきたか、さらにはそれが今日の私たちをどのように支配し続けているかを探った、初めての本である。「所有する」というあまりにも身近な言葉を、私たちはふだんほとんど意識せずに口にしている。だが所有は、じつは人間の頭にあるなかでも一、二を争うほど強力な概念だ。何をするか、どこに行くか、自己や他

者をどのように言い表すか、だれを助けだれを罰するかといった人間の行動に、所有の概念は深く織りこまれている。文明というもの自体が所有の概念をもとに築かれており、所有の概念なくしては人間の社会は崩壊する。なぜこのような所有への依存が生じたのか。人はみな、所有の力を生み出し行使する術をどのように身につけるのか。なぜ人間はもっと所有したいという欲望に駆られるのか。所有（オーナーシップ）の概念が、私たち自身（オウン）のアイデンティティーの形成にどう関わってくるのか。こうした問いを自問し始めたとたん、だれもに馴染みのある身近な所有の概念が、とたんに見知らぬものに思えてくる。所有はもはや法的状態でも、経済的地位でも、政治的武器でも、所有者を明確に区別する便利な方法でもない。所有という概念が、人間とは何か、そして人が自分自身をどうとらえているかを決定づける特徴の一つとなるのである。

人は何も持たずにこの世に生まれ、何も持たずにこの世を去る。だが生と死の狭間、人生という舞台に立つこのわずかなひとときだけは、あたかも自分という存在が所有物によって定義されるかのように、人は所有を誇示し、所有に思い悩む。多くの人はこの絶え間ない所有の追求にがんじがらめになった一生を送り、ときには自分や子どもたちの命の危険をも顧みず、果ては地球の未来すら棒に振ろうとする。この状況を変えるためには、所有とは何か、所有の概念がどこから来たのか、所有からどのような動機づけが生まれるのか、そして所有に依らずとも同じくらい幸福になるにはどうしたらいいのかを、私たちは理解しなければならない。

モノを所有することで幸せになれると私たちは考える。だがむしろ、所有によってかえって惨めさが増すことも少なくない。富の蓄積に病みつきになった一生をふり返り、「ああ、いい人生だった」と心から言える人がはたしてどれだけいるだろうか。所有の追求に我を忘れる日々の中で、自分にとって、人類にとって、あるいは地球全体にとって、所有で何が成し遂げられ何が失われるのかを、私たちが本当の意味で深く理解することは稀である。物質的豊かさを追い求める人がどれほどの労力を費やし、どれほどの競争に明け暮れ、どれほどの幻滅に襲われ、どれほどの不正をなし、最終的にどれほどの損害をもたらしているのかをすべて勘案すれば、絶えず所有に躍起となる人生はひどく虚しいものと映る。それでいてなお、人間には自制するということができないらしい。

私たちは、所有（ポゼッション）という悪魔に取り憑（ゼ）かれている（ト）。だが、この悪魔は祓うことができる——なぜ人はやむにやまれず所有するのかという、その理由を理解しさえすれば。